

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**大学院学生研究**  
**2021年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学研究科	史学専攻		
<b>研究代表者</b> (2022年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名				
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 3年		王尊龍				
<b>指導教員</b>	所属部局・職名		氏名				
	文学部・教授		上田信				
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	「冊封・朝貢」体制における漢詩文の機能と役割：琉球王国の表文を中心に						
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・共同研究者) ※2022年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名				
	文学研究科・史学専攻・東洋史コース・博士課程後期課程3年		王尊龍				
<b>研究期間</b>	2021年度						
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円						

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

近世の琉球王国では、古琉球時代と全く異なる外交方針が整備されると同時に、学問・思想の領域においても新しい認識枠組の形成が見受けられる。士族層に顕著にみられる漢学を重視する思想的傾向が、その代表である。こうした状況の背景として、知の領域における非連続的変化があったと考えられるが、従来の研究では、琉球漢学の隆盛を直線的な発展の結果として捉えてきた。そこで本研究では、上記の問題意識に基づき、中国との冊封・朝貢関係を維持するために必要不可欠な公文書である表文に焦点を当て、十七世紀半ば頃に起きた知の構造転換は、いかに近世前後の琉球表文の特徴に影響を与えているかを考察した。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 近世琉球 } { 表文 } { 漢詩文 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

## ① 琉球表文の収集・整理

現存する琉球王国時代の表文史料は、その系統によって三種類に分けることができる。一、原本：その大部分が中国第一歴史档案館に所蔵されており、他に五件が中央研究院歴史語言研究所に、一件がハーバード燕京図書館に蔵されている。なお、中国第一歴史档案館所蔵の二二件は、『清代琉球国王表奏文書選録』（黄山書社、一九九七年、以下『選録』）として刊行されている。二、内閣「史書録本」：清代では、各地からの表奏文書が上覧された後、六科の官員がそれを抄写して副本を作成する制度があった。こうした副本は、必要に応じて複数作られるが、そのなかで内閣に送られ史官に供されるものは「史書録本」という。現時点で公開された琉球表文の「史書録本」について、『選録』は五三件を収録している。三、『歴代宝案』所収写本：明代二五件、清代一八五件の写本が所収されている。本研究では、これら諸系統の表文史料を網羅的に整理し、基礎的なデータベースを作成した。

## ② 各時代における琉球表文の様式、用語表現の分析

琉球国王が明清皇帝に献上した表文は、その用途によって進貢表、慶賀表、請封表など様々な種類があるが、文体そのものに関しては、基本的に冒聯、解題、頌聖、入題、自謙、祝聖という六段階で構成されている。本研究では、現存する琉球表文をすべて段階ごとに分解し、琉球表文の様式構造は明初から清末までの時期にかけていかに変化していったかを通時的に考察した。その結論は以下のようにまとめられる。一、『歴代宝案』に所収されている明代と清代の表文には明確な差異が確認できる。明代の琉球表文は、『大明会典』に掲載されている「群臣上表」のサンプルをそのまま移用するものがほとんどであり、同じ書式・内容の文章が複数回使用されている。それに対して、清代、具体的には康熙七年（一六六八）以降に作成された表文は、明代のような文章の重複が見当たらず、すべて新しく作られたものである。二、明代琉球表文のもう一つの特徴として、同じサンプルを複数の用途に用いることが挙げられる。（例：「聖節日正旦冬至群臣上表」サンプルを進貢表、謝恩表として提出）三、『大明会典』所収の表文サンプルは、清代の康熙五年（一六六六）まで使用されていた。四、表文様式の変化は、首里王府が国内に発給する辞令書の様式が「過渡期辞令書」（漢字、ひらがな併用）から「近世琉球辞令書」（漢字のみ）へ移行する時期と概ね一致している。

## ③ 表文原本と『歴代宝案』本の比較

『歴代宝案』は、十五世紀前半から十九世紀中葉までの琉球と中国、朝鮮、東南アジア諸国との往復文書を集成したものであり、久米村人が外交文書を起草する際の模

**研究成果の概要** (つづき)

範例文集でもある。その二つの性格について、前者を後者の前提として捉えられてきたが、本研究はこうした捉え方の見直しに資する事例を提供した。現在中央研究院歴史語言研究所に蔵されている「琉球王世子尚貞請封表」原本を『歴代宝案』が所収する同文書の副本と比較したところ、両者の文面には大きな相違が見られた。この点を最初に指摘したのは当該原本を整理・出版した渡辺美季氏である。また、その原因について、同氏は、中国到着後に琉球使節が「空道」という国王印の押された空白文書を利用し、『歴代宝案』と異なる文面の表文を作成・提出した可能性が大きいと述べた。しかし、本研究ではこの二通の表文の用語表現、声律平仄などを分析した結果、『歴代宝案』本は原本より洗練された漢文で書かれていることがわかった。そのため、この事例に関しては、「空道」が利用されたのではなく、後世の表文制作者にできるだけ完璧な例文を提供するため、うまく作れなかった表文原本を『歴代宝案』に入れずに、例文としてより相応しいものを残した、という可能性も十分あると考えられる。すなわち、ごく少数な事例ではあるものの、『歴代宝案』の編纂にあたり、その外交文書を記録・保存する機能より、模範例文を提供する機能の方が優先される場合もあるのである。こうした状況は、近世士族に広がる漢学重視の気風を反映しているだろう。

**④ 表文作成のための学習参考書の分析**

四六駢儷体で構成される表文を組み立てるには、作者に漢詩文の知識を含む高い漢学素養が必要とされる。その上、国王名義で提出する文書であるため、外交問題と直結する可能性があり、それに関する人材の確保と育成は琉球にとって極めて重要な課題であった。本研究では、市立米沢図書館所蔵の「擬表」という表文作成のための学習参考書を主たる史料として検討し、近世の久米村士族はどのように、福建省の下級知識人との往来を通じて模範文案を入手し、表文の作成技術を身につけたのかを考察した。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

**① 雑誌論文**

該当なし

**② 図書**

該当なし

**③ シンポジウム・公開講演会等の開催**

該当なし

**④ その他**

〔会議論文〕(計 1 件)

「清代琉球使臣的應制詩進獻與代筆 (청대 琉球 사신의 應制詩 진헌과 대필)」、제 5 회 성균관대-남경대 연행록 국제학술대회 : 연행록과 동아시아 문화교류 (「第 5 回 燕行録 国際学術大会 : 燕行録と東アジア文化交流」 会議論文)

〔学会発表〕(計 2 件)

「清代における使臣献詩 : 琉球使節の応制詩献上と代筆を中心に」 2021 年度明清史夏合宿 (2021 年 8 月 7 日)

「清代琉球使臣的應制詩進獻與代筆 (청대 琉球 사신의 應制詩 진헌과 대필)」、제 5 회 성균관대-남경대 연행록 국제학술대회 : 연행록과 동아시아 문화교류 (第 5 回 燕行録 国際学術大会 : 燕行録と東アジア文化交流)、成均館大学 (2022 年 1 月 20 日)

〔学会発表予定〕(計 1 件)

「近世琉球における学知の構造転換 : 明・清皇帝への表文を手がかりに」 立教大学史学会 2022 年度シンポジウム「世界史における「学知」の政治的ダイナミズム」、立教大学池袋キャンパス、2022 年 6 月 18 日。